

編集後記

雑誌名	日本文学誌要
巻	9
ページ	67-67
発行年	1963-08-10
URL	http://hdl.handle.net/10114/00019079

編集後記

本号は古典関係の論文が主になった。前号が近代のものが多かったので、多少力点を移動させてみたのであるが、もとより特集というような意図あつてのことではない。

だいたい編集後記というと、歳時記と学内時事、それに内外情勢の一端などとりあわせてかくのが通例だが、このところ年一回の刊行では季の移ろいにも妙味を発揮できぬし、内外無事とは決していえぬが、こんなスペースで利いた風のことをいってもはじまるまい。

そこで今回は、本誌の編集の心おぼえみたいなものをするしてみる。

まず本「日本文学誌要」は、法政大学国文学会の機関誌であつて、そこから当然法政日本文学科の教員、在学生、卒業生の発表機関という性格をもつ。法政のイキのよい研究成果を世に送り出してゆく、もちろん唯一ではないがたいせつな場なのである。本誌が刊行されるとその都度、全国の主要な、すくなくとも国文学科をおいている大学、図書館に送られる。わが日本文学科が学問的に活況を呈

しているかどうか、その独自の学風を育て発展させているかどうか、がはかられるひとつのメーターとなつてゐることはいつておかねばならないだろう。

第二にその内容は日本文学の研究論文が中心になることはいうまでもないが、資料の紹介、翻刻、国語教育の論文、現代色のゆたかな座談会、エッセイなども随時収められてきている。その点、月並みな学会誌調にとどまらぬ鮮度を今後も保っていきたいものである。執筆陣は圧倒的に大学院在学生をふくめての卒業生が多いが、これはそうあるべきことだと思ふ。ただ編集部としては、毎号教員にも寄稿をお願いし、在学生にも紙面を解放している。前者はほぼその通りに実現できているが、後者はまだ不十分である。在学生諸君の積極的な投稿をこのさいお願いしておく。

刊行ひん度は、学会費の改訂が来年度から実現すれば（本年は手続上間にあわなかった）、年二、三回が刊行可能である。それだけのスペースを充満させる余力はたつぷりあると信じているが、今からその心用意を会員諸氏にしておいてほしい。

次号の〆切は来年三月末である。

（S）

一九六三年八月十日発行

日本文学誌要 第九号

編集委員 法政大学国文学会

小田切秀雄 正木 信一

阪下 圭八 小林 茂夫

橋本 稔 駒尺 喜美

印刷者 東京都中央区銀座東三ノ七

東銀座印刷出版株式会社

電話東銀座(541)三九四六

発行所 東京都千代田区富士見町

法政大学大学院内

法政大学国文学会

電話東京(301)二三五一番

振替東京六九四三番